

振り返って、戦争とは愚かなり。無念にも再び祖国の土を踏むことなく逝った多くの戦友の冥福を心より祈るものであります。合掌。

## 終戦五十年近くの今日を迎えて

和歌山県 北 又 光 夫

戦後は既に五十年を過ぎようとしております。今思ひ出すことも嫌であるし、話すことはなおさら嫌である。けれども、軍隊生活の厳しさや、零下三十度、風速を加えれば七十度のソ連シベリアでの抑留生活のことなど、我が子孫に、また全日本国民のすべての方々にお伝えして、二度と私たちの味わった労苦をさせたくはないと思い、あの極寒の地から生きて帰ることのできなかつた亡き戦友たちの代わりに、有りのままの真実の話をお伝え申し上げたいのです。

私の生い立ちは、北又家の長男として育ち、生来車好きで、若いころから親類の運送店の手伝いで励み、

昭和十七年にトラックの運転免許を取得した。そのころから、軍隊に入れば自動車部隊だろうな、などと、我ながらに思い込んでいたものです。ところが、甲種合格。結果は歩兵部隊への入隊でありました。昭和十九年十月二十日、中部第二十四部隊です。

家を出るときは、両親に最後のあいさつのお礼をして、生きて帰れるという気持ちは全くないままに、十月二十一日の朝から、言わば戦時訓練としての厳しい軍隊生活が始まっていたわけで、分配された各服装ほか衣類種々などのことから、いよいよ満州行きだろうなと推察したものです。当時、後から知ったことではあるが、出迎える人は、満州からの尾形軍曹であった。十月三十日夜、二十四部隊の営門を出るとき、憲兵は馬で走り回っていた。道の両側はちようちん行列のような状態で、いっぱいの人で、我が子に会いたい人々が身動きできないままに立ち尽くしている。こちらは親に気づいても合図のしようもなく、口に表わし得ない厳しい状況のまま別れた。三十日夜、和歌山駅を出発してどこへ行くのかもちろん我々にはわかるはず

もない、着いたところは博多であった。ここより朝鮮に渡る。途中、海上で何が起るか、無事に着けるかどうかかわらないとのこと。赤フンドシをつけよ、との指示があつた。すべて国に捧げた命だ。どのようにならうとも致し方がないと思つた。幸いに朝鮮の釜山に着いた。それから長い長い汽車の旅。何せ初年兵であり、どこに向かつて走っているか分るはずもなかつた。後で知つたことであるが、最終地は満州東安省密山第六三四部隊であつた。歩兵第六中隊で、当中隊長は広瀬中尉でした。私は軽機班に配属されました。その年の正月はそこで過ごし、五月ごろそれぞれ兵は各地への転属があつて、九州や南方行きと配分されていった。私は八面通へ行きました。

それからは、毎日、陣地構築の穴掘り作業と訓練でした。八月の七日、八日ころだったと思う。突然不意打ちにソ連機が飛来して掃射を始め、雨のように我々に襲いかかり、多数の戦死者を出しました。早速兵營に戻り移動準備です。靴下に米を詰め、雑のうに手榴弾二十発を入れて急げ急げで、夜、兵舎を出てどこへ

行くかはわからないままの夜行軍が始まつた。そのようにして何日も経過し、やがて水もなく腹がすき歩けない兵も出てきて、部隊より外れてしまひそうになる。そのようなときに、足手まといになるためであるのか、班長に「撃ち殺せ」と命令した人がいた。その人の名前はここで言わないけれど、今もその声が私の耳に残っている。特に掖河、樺林、牡丹江での戦いは大変なことのように、多数の戦死者が出たであらうと思う。

水がなくて、夜、道路に腹ばいになつて唇つけて水を吸う。夜が明けてみれば、馬と戦友たちの死体がいっぱい散乱していて、それが既に腐つて、うじがわいていた。この水をすすつたと思うと、ぞつとしたこと何度か。特に掖河での戦いで、小さい朝鮮馬に乗り刀を抜いて指揮をとつていた大隊長が一番先に敵的になり戦死されたのは、私の目の前のことでした。このことは、五十年を過ぎた今も頭から離れません。

残つた私たちは、大阪出身の古兵の一等兵のもとで十一名、山に閉じこもり、夜更けまで様子を見てから、この下川一等兵の言うとおりに行動することになった。

まず、前の戦友の帯革バンドをつかみ、後の者は前者のバンドをつかんでヘビのようになって、頭もつかる川の流れを渡る。私は水泳は全然ダメで、必死になって岸に着いた。そのときの喜びは口には言えないうれしさで、今でもあのときの下川古兵殿を忘れられず感謝いたしております。川を渡り、どこの部隊であるか知らないが友軍であるからよいとして混成部隊に入って、その後、その部隊と共に行動しました。初年兵である私には分かることなし、運命をこれに委ねるよりほかなかった。

そのころになっても、日本の飛行機は一機も飛ばさずして、飛んでくるのは敵機ばかりであった。本当にどうしたことかと我ながらに思う。毎日戦死者が増えるばかりで、私自身もいつのことか、毎日が今日限りの命と思うことが続いた一週間過ぎたころだったと思う。終戦の知らせが伝わってきた。そのときは全く茫然といたしました。我ながらに心静かに納まったときは、「あれ!! 命あつたのか」と信じられなかった。

次にやらされたことは、すぐに武器一式を前に出せ

ということ、自動短銃を持ったソ連兵の居並ぶところに出て無条件降伏の態度を示した。ああ、これで負けたのかとしみじみと思った。そのときも、残った一発で「死」を思って戦友に話しかけたとき、下川古兵に、今になって死に急ぐことはないと注意されました。班長ほか小隊長たちで日本刀を持っている上司は、皆、隠れてそれを土に埋めました。ソ連兵に略奪されるのならという心境だからでしょう。私も腕時計を奪われました。

それから一週間ぐらいたったと思う。「ヤポンスキー、東京ダモイ」だからということで、官舎の古びた家で過ごしました。後日になってだまされたと分かりました。

#### 抑留生活始まる

「ヤポンスキー、東京ダモイ」と言つて貨車に乗せられ、走ること五、六日、私には方向が北の方へ向かっているのか南に行っているのか分からないまま、途中止まることも何度かあり、なかなか動かない貨車の中では、戦争中のくたびれが出て話し声もなく、便所

は貨車の隅のところ、大・小便をたれる。小便を出す者も多かった。このようにしてだまされてついに着いた所は、古兵の話では「プエンキ」ではないかという。確かなことではなかったが、それはソ連のどの辺りであることかも、もちろん分からない。見渡す限り何も無い一面の野原で、分隊を組み、班ごとに家をつくれとのこと。各自、木を切り草を刈ってヒモをつくって草屋根の家を建て、草を並べて一夜を過ごす。抑留の第一夜であった。明けて朝、「田中一人君」、熊本県出身だと思ふ、言葉の中で「バツテン」で話してたから。原因は栄養失調と下痢、小便がとまらず死亡した。彼は、二十年五月入隊の初年兵であったと聞いている。

抑留第一日目の作業は伐採であった。二人引きの大きいノコギリ、タポール（オノ）を持たせられ、ソ連兵の言うままに山へ向かう。山では大きな木に二人で切り目を入れ、また反対側よりタポールで切り目を入れる。なれないから思う方向へ木が倒れない。腹が減って動かない。もちろんノルマつきであるが、終わ

らない。作業のでき方を言うが、とても話にならない。帰り道では草をむしり、腹の足しにした。このアカザという草は、日本人の生命を助けてくれたのではなからうか。

寒くなってくると雪が積もり零下三〇度、風速が加わると零下六〇度、七〇度にもなる。作業山に行く道々、口ヒゲやまつげにツララができること冬中毎日のことであった。私は現役兵で若かったが、召集兵で四十歳近い戦友が相当数いました。栄養失調と戦争中の疲れに加えて寒さと作業、路上で倒れて息を引き取る者が始めました。ノルマを終えて帰るとしても、木の枝と草を並べてつくった仮兵舎で、家と言えたものではない。横になって寝ても、背中がゴロゴロして休まれない。冬は疲労と寒さと不眠に悩まされました。食事は、二十本入りのタバコの箱二個くらいのおおきさの黒パン一個で昼食終わり、朝と夜は雑炊二合くらいとサケのかけら一個で、ほかは何もない。これでは仕事などできるはずはありません。体力はだんだんなくなり、気力のなくなるのは当然のことであった。

このようでは、次にシラミに食われて死ぬよりほかはないと思われたものです。正月が来ても寒さが身にしみ、あすは死ぬのかと、毎晩母親のことを思い、我々は皆、寄り添って寝たものです。それというのも、二人寄り合つて休めば体温で暖かいからです。しかし、戦争中からずっと洗濯はせず、湯に入っていないからシラミがものすごく、腰まわりや首筋はシラミうじゃうじゃで、またシラミの卵でどうしようもなかった。

初めての冬、古兵で陣内上等兵と皆が言っていたその彼は、夜静かになつたまま朝起きないので、そばの者二人で近寄り起こしたが、声もなく既に死んでいました。やはり栄養失調死であつた。シラミは不思議に命を引き取ると体外に出てしまふ。私たち五、六人で寒い外に運び出し、土を掘ろうとしても、極寒零下何十度となるととても掘れるものではない。少し掘つて土を被せ、合掌して拝み、心から冥福を祈つた。

小便はすぐにカチカチに凍つた。大便をするときは、内地のツバメが電線にとまつているように一列に並んで二本の丸太でやる。もちろん屋根は木の葉っぱのつ

くりで、寒いことこの上なしである。だから、腹下りとなるとお尻を出す回数が多くなるので、ついには死ぬよりほかはないということで、全く情けないありさまでした。これは真実です。仮兵舎、木の葉バラック便所は、一日ごとに大便が上につかえてくる。十字鋏で碎いてならず。すごく量が多くなれば、丸太の木を切つて足場の上に並べて高くします。ここでの作業では大手袋を使つてやるのだが、糞がこれに飛び散りしみ込むことになるので、バラック小屋の兵舎に持ち帰ると、少しの暖かさでも溶けて大便の臭いにおいがする。体にもしみついているのだ。手を洗うにも水がないので、その手で黒パンを分配することもあり、衛生的に考えても病気になるのは当然である。このような状態の中で、ソ連側からはダモイ話はなく、栄養失調で次々と死んでいくのです。第一回目の冬である。あすの朝は自分も死んでいくのかと何度も思う。

雪が腰以上にあるので、木を切るためにどこへ行つたらよいのかわからない者はかりであるし、逃げるのに足元が雪のために動けないので、他の者が切つた木

の下敷きになり死んだ者が相当数ありましたので、お互いに散らばった位置で木を伐採しようと話し合い、ソ連側の言うことばかりしてノルマに追われては皆死んでしまうぞと、互いに励まし合つたものです。

しかし、ノルマは増すばかりで、雪の中でつまずけば起き上がれないことが何度かあつて、自分で自分に気合をかけて、その都度何が何でも内地に帰るんだと言ひ聞かせる毎日でありました。

作業終わりの帰る途中の道路で凍つたジャガイモを拾つて持ち帰り、暖かい部屋で雪を払い手でもむ、氷がほぐれた部分を見てアツと驚く。馬糞であつたことの情けなさ、げっそりであつた。食べ物がなく不足している状態で生命にかかわるとなれば、丸い馬糞でもジャガイモに見えるのであつて、食べ物のないことはと辛いことはありませんでした。

戦友同士で、ソ連兵の歩哨の目を盗んでラーゲルから逃亡しようかと話し合うこと度々あり。一か八かやると言う者、いや待てという者ありで、私は決行しなかつたが、二、三人組んで決行した兵がおりました。

無事成功できるよう祈りました。そのときは、彼らのその後のことは知る由もないことです。

また、二、三人一組になつて、歩哨の目を盗み鉄条網を潜り、夜、食べ物を盗みに行く。雑のうに入れ、無事鉄条網を潜つて中に入ったときは大変うれしかったものです。またの日の夜、私一人で盗み取りに出ました。一人の方が静かで見つかりにくいのです。もちろん決死であり、見つければ撃ちまくられることは必定です。その夜は成功してホツとしました。

ある朝、作業出発前に皆の前へ、そりに我々の戦友の死体を乗せて引きずつてきて、ソ連側の言うことには、「ヤポンスキーよ、お前らが逃亡や盗みをするこのように撃ち殺すのだ」と見せつけられました。

こんなことがあつたときは、おのれも殺されてはと思つて盗みをやめるが、腹が減り食べる物がなくなるとたまらず、致し方なく決行しました。運よく盗みをして帰り、ラーゲルの鉄条網を潜つて中に入れたときのうれしさはたまらない。このようなことはみんな戦友たちのやつたことで、やらなければ命を保つことが

できないほど食糧不足であったからです。腰をおろすと、皆、内地での食べる話ばかりで、餅におはぎなど、話は切れず、一度だけでも腹いっぱい食べて死にたいなあと言い合っていたのに、翌朝そのうちの一人が栄養失調で死んでしまった。出身地は聞いてなかったのだからなかったが、召集兵のようで、見たところは妻子ある四十歳近い年頃の人であった。冥福を心からお祈り申し上げます。

また一人、前に話した熊本県人で昭和二十年五月入隊の初年兵田中一人君と同じ初年兵で後藤幾造君、多分同県人であろう戦友が、栄養失調で腹がパンパンに脹れ上がり血便がとまらず、私は彼の尻をふいてやったこと幾たびか。ふくといつても何もない。自分の防寒服の端を破った布で尻をぬぐう。自分の手も血便で汚れ、雪で洗うのであるが、一生懸命世話したのに、彼は最期のときまで「すまぬ、すまぬことだ、君はどうか無事に内地に帰ってくれよ」と言っていたが、間もなく息を引き取ってしまった。本当に誠心を尽くしてお世話したのに残念であった。

冬は凍って土は固いために穴を掘れないから、夏にノルマ外に五、六人寄り集まって、我々が死んだときに埋める穴を掘りました。「おれが死んだら土を多くかぶせてくれよ」「貴様が先なら土を多くかぶせてやるよ」と約束した。たとえば田舎で大根を漬けるように仕組んで死体を埋めて土をかぶせる、さらにまた、死体を入れて土をかぶせる、このようにしたから、だれの死体を何体埋めたかは、当事者以外わかることはないであろうと思います。

入ソ当初、特技のある者は申し出よとの話がありましたが、特技ありと報告すればダメイできないことになるのではないかとお互いの話の中で出たので、申し出をしなかった。でも、かような重労働で食べ物の少ない状況では命がないと、思い切ってトラック運転手であると申し出ました。

すぐに「ハラショー」よろしい、「ダバイ」すぐ来いと言って連れていかれたところはトラックの車庫で、三十台くらい並んでました。「ダバイ、ダバイ」で乗せられ、早速案内つきで走り出しました。一時はどこ

へ連れていかれるのかと不安で、山道を登り始めたときは殺されるのではないかとも思いました。着いたところは日本人の抑留者ばかりで、やれやれの気持ち。

「ダバイ、ダバイ、ヴィストラ」早く来いと言う。早速、五、六人集めて木材を積ませることにした。私は運転台で休んでおれということで、一車に積み込むまで四、五十分くらいだろうか、ゆつくりと居眠りさせてもらいました。

トラックが材木満載になれば、私にダバイの命令で発車です。当然案内つきで、着いたところは広い集積場で、近くにソ連人の家が点々と目につきました。もちろん引き返すときも私は何もせず終わり。ソ連兵の歩哨は何度も「ハラシヨラポーター」と言ってくれて、本当に仕事は楽で、褒めてくれ、最高の気分がありました。大工、左官、理容師など、技能者は皆、復員後の話では、命を保って帰ってきているようでありました。今考えれば、私はよくも運転手であったものだなと思えました。

しかし、冬来れば内地と反対で、ラジエーターにお

湯を入れ七輪（かんでき）で火を起こし、オイルパンの下でオイルを暖めなければクランクが回らない。これが第一番の仕事であって、毎朝のこととして出勤までにエンジンをかけなければ「ヨオポイマーチ・ハラシヨニエツト」と言って歩哨にどなりつけられることも何度かありました。いつでもかかりやすい車を先にかける。次にワイヤーをかけて引つ張る。この段取りで上手にやり遂げました。全車のエンジンが動き出したときは最高であって、次はなれた仕事としてハンドルだけを持っておれば一日の作業は終わりで、楽な仕事であった。運転手様々でありました。だから、無事復員できたのだと思います。

私はソ連で三回冬を過ごしましたが、十月ごろに、いま一度冬を過ごすのかと思うと、とても帰国できな一と思ひ、内地の方であろうと思う空を眺めること幾晩か、だれ言うもなく東京ダモイらしいぞと話が出てしばらく、四、五日して「ヤポンスキー、東京ダモイだ、集合せよ」と伝わりました。今度こそは本当だなと思ひ、喜び合いました。



貨車でナホトカまで来て三日くらい待たされたが、日本の船に乗ったとき初めて、今度こそは日本に、内地に帰れるなと思うと、うれしさを涙が流れて言葉にはなりませんでした。船が舞鶴港に着いたのは昭和二十三年十月二十六日で、船名は「山澄丸」でありました。六千八百名もの二日間の入国手続らしきこと、消毒など済ませて、十月二十九日朝に舞鶴港を去り、四年間のシベリア生活にも別れることができて、まさに夢のようであった。

内地故郷に帰りましたが、シベリアの極寒零下の地で強制労働をさせられ、栄養失調で死亡して逝った数多い戦友たちのご冥福を今改めてお祈り申し上げますのです。

再度繰り返し話しますが、悲惨な抑留生活の中で、帰国を夢見て祖国に帰ることもできず、シベリアの土となった戦友六万数千人余りのためにも、再び同じことを繰り返すことのなきよう後世に伝えるべきが大事であると思い、とぎれとぎれであります、真実の話として書き綴りました。

昭和二十三年十月二十八日の夜、あす帰郷できる喜びで、初めてもらった九百円で帰郷切符を求め、菓子、果物などを買い、一錢も残さず出し合って、内地に上陸した者すべてが夜の更けることも忘れて帰還の喜びを語り合いました。翌朝トラックに乗せてもらって舞鶴駅に、そこでまた喜びのひとときがあって、各地の我が家へとそれぞれの列車に乗りました。

県からの世話人として一人が出迎えに来てくれました。車中、私が特にみすばらしい服を着ているので、同乗の人たちは私の方をジロジロと眺めるように思いましたが、私としては我が家に帰れるうれしさいっぱい、何とも思わなかった。

東和歌山駅で県の世話人の方と別れ、二度と生きて帰れないと思って出た湯浅駅に着きました。親類や隣組の人々の出迎えに涙で言葉も出ません。家まで十分ほど歩くのも出征当時の足どりと違って、うれしさのあまり軽々として早く家に着きました。家の前で出迎えてくれた皆様にお礼申し上げて、家の中に入って一番先に母親に飛びつき、抱き合って泣きました。五十

年過ぎた今日、いまだにあのときのうれしさは忘れられません。そして、先に目についたのは、私の入営時の写真に陰膳を供えてくれた様子を知り、親の深い愛情と御恩をつくづくと感じ、これでこそ無事に帰れたのだなあと思いました。

復員後の話はいろいろありますが、切なくて書きませんが、満州で一番うれしかったことを話そうと思う。それは密山で親類の一等兵に招かれ、知り合いの人が来てるから面会させてやるとのこと、将校室のドアをノックしてあけて中に入り、十五度の敬礼をして頭を上げるまでだれであるか分からなかった。見れば私の故郷、地元湯浅の前田彦次郎氏である。場所は将校室、部屋には外にはだれもおらない、前田氏一人である。前田氏が言う。「湯浅に帰ればお前のうちとは心やすい仲じゃないか、そうかたくなるなよ、だれも来ないから甘い物でも食えや、元気でやれよ」と励ましたの声をかけてくれました。階級差別の厳しい軍隊の中のやさしい言葉である。あのときの言葉は、私には一生忘れられない。

前田さんも無事復員され、現在七十三歳、達者で農業をされております。いつまでも元気でおられますようお祈り申し上げる次第です。

昭和十九年十月二十日入営、昭和二十三年十月二十九日復員。四年間、国のために。七十歳。

## 交戦、抑留体験記

茨城県 高橋 太造（旧姓 遠藤）

私は、茨城県鹿島郡若松村大字太田新田日和山という所で、大正十四年六月十四日に生まれた。小学校は隣村の矢田部小学校に入学、十五年に卒業した。一年後、満蒙開拓青少年義勇軍に参加、十六年三月に内原訓練所に入所した。

家業は農家であるが、父は桶屋職人でもあり兼業とも言える。家族は祖母と両親、兄三人、弟三人、妹三人の十人兄弟の大家族であった。小さいときから家業の手伝いをさせられて育った。